
兎のお手伝い ~ 復讐編 ~

銀色天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兎のお手伝い ～復讐編～

【Nコード】

N6956A

【作者名】

銀色天使

【あらすじ】

童話のカチカチ山ってよく考えてみると凄いお話。これは、そんなカチカチ山のお話です

昔々…と言っても、そんなに昔と言う訳でもないのですが、今から見れば、まあ昔なんで…否、でも“昔々”という出だしたとんだが大昔みたいですよね…
そんなに大昔でもないのに…ああ…まつ、こんなことしても埒が
かない
物語をはじめますね。

そんなに大昔じゃない昔、といつてもやつぱり現代人の視点からだと大昔になるのでしょうか…

まあ、そんな感じの時代に、ある山の奥のほうで…
これも、そんな山奥という訳ではないんですよ。
何というか、町からちよつと遠い程で。

この『ちよつと』っていうのも…ああ…物語が進まない…
まあ、その山に一組の老夫婦が住んでいました。

老夫婦と言っても…ああ…苛々する。

この際もつどうでもいいや。

で、一組の老夫婦が住んでいた訳です。

ある日、爺さんは山の畑へ豆まきに出掛けました。そこで

「一粒の豆、千粒になあれ。一粒の豆千粒になあれ」と、意味不明かつ理解不能で不可能な事をほざきながら、豆を撒いていると、何故そんなところにあるのか分からない切株の上に座っていた狸が…
この狸、どうやって座ったんでしょうね。

……謎だ。

まつ、いいや。えっと、座っていた狸が爺さんの声にあわせて、

「じいの豆片割れになあれ、じいの豆片割れになあれ」
と、はやしたてました。

それに激怒した爺さんは…何故狸の言葉が…この物語に限らず、昔話やら何やらは何故、動物や花と会話できるんでしょうか

ようか…ねえ！！

まっ、そして激怒したじじい…否、爺さんは狸目掛けて鍬を投げました

何故豆を撒いているはずのじじい…おっと、爺さんが鍬を…

まあ、何処からともなく取り出し、投げ付けました。

すると狸はコロリと倒れたので…このコロリって擬音も意味不明だ…え…あっ、倒れたのでじじいはさかさず何処に持っていたのかしれない縄で狸の足を縛り、家に持って帰りました。

爺さんは言いました

「ばあさま、ばあさま。畑で狸を捕まえた。あわもちでもついて、

狸汁こしらえておいてくれ」

そしてじじい…あっ…爺さんは町へ行きました。

爺さんが出かけてから婆さんはあわを蒸かせて餅をペタンペタンつき始めました。

すると狸はモゴモゴと動き出して言いました

「おい、ばあ！俺も手伝ってやるからこの縄、解いてくれ」

「駄目だよ。じいさまに叱られるから」

婆さんは断わりました。が狸があんまり言うので縄を解いてやりました。

狸は婆さんと一緒に餅をつきながらわざとあわをこぼしました。そして婆さんがそれを拾おうと屈んだ隙に槌を振り上げ、婆さんを打ち殺してしまいました。

狸は婆さんの着物を着て、婆さんに化けました…………

いや、しっかしこの狸は凄いですねえ。

全く…ホントに狸か？

そして、暫くすると、爺さんが帰って来ました。婆さんに化けた狸は言います。

「じいさま、じいさま。あわもち出来たし、狸汁もこしらえた。温かい内に上がってください」

「そうか、ではいただきます」

と爺さんは言い、箸を取って食べ始めました。…が、すぐに「ばあさま、この狸汁なんだかばあさま臭いよ」と、言い…

イヤイヤ、有り得ないでしょう。

ばあ…否、婆さん臭いとか少なくとも一回食ったことねえとわかんないでしょう。

でも、狸の正体を見破れそうですね。

まっ、狸の言い分を聞きますと

「じいさま、狸は古くなるとばあさま臭くなるもんだよ」

はい、訳が解りません。こんな言い訳する狸も狸ですが、この言い訳を信用して食べたじいもじいいですよ…あっ…ネタばらしを…気にせず進めましょう。

え、まっ、その言い訳に納得した爺さん…否、じい…えっ…あ、爺さんは婆さんに化けた狸と一緒にばあさま汁をすっかり食べてしまいました。

食べ終わった後、狸は戸口の方へと駆けて行って

「あわもち食ったしばあ汁食った、流しの下の骨を見る！」

と叫ぶと、着物を捨て、元の狸の姿に戻って山へ逃げて行きました。爺さんは悔しくて悔しくて、おいおい泣いていると…まあこのじいも一緒にばあを食っていた訳ですが…

おやっ…？私の出番でした…

「おいっ、じい…違った、どうしたんですの、お爺さん」

そこに現れたのはとても可愛らしい兎、つまり私。

「狸に…狸にはあさまを殺されてしまっ…うう…」

「まあ、それはそれは…。よし、私がきつと敵をとってやりますのそついうと私は山へ帰って行きました。

私がかや山へ行って、かやを刈り始めました。はっきり言うところだるい。

暫くすると、狸がやって来て

「うさぎどん、うさぎどん。かやを刈って何にするんだい？」

と聞きます…うさぎどんって…お前…どんって…

「今年の冬は寒いらしいです。だからかやを刈って、小屋の屋根を塞ごうと思ってますの」

「そうか…じゃあ俺にもかやを刈らせてくれ」

「いいですよ。一緒にやりますの」

そして私と狸はかやをいつぱい刈って背中にしよいました。

さくて、ここからが私、兎の復・讐・大・進・撃！！

狸の背中では“カチッ、カチッ”と火打ち石を打ち始めました。すると狸が

「うさぎどん、うさぎどん。カチカチいうのは何の音かな？」と言いました。…うぜー狸だな…

「えーと…あ、そうだ…否、そうです。この辺りはカチカチ山って呼ばれますの。きつとカチカチ鳥の鳴き声ですの」

…かなり苦しいかな…

「へ、そんな鳥が…うさぎどん、物知りだな」

よつつつしゃ！こいつ馬鹿だ！！馬鹿狸だ！！よし！！

暫くすると、狸の背中のかやがぼうぼう燃え始めました。すると狸が

「うさぎどん、うさぎどん。ぼうぼういうのは何の音かな？」と聞いてきます。

「この辺りはぼうぼう山ですの。ぼうぼう鳥の鳴き声ですの」

「ほ、そんな鳥が…流石うさぎどん。しかし…今日は暑いな…こんなのしよってるからか？」

その通り。そんなのしよって歩いてるからだよ。

くは、おもしれえ。

え…あつ、んで炎が背中に広がって、馬鹿狸は熱くて熱くて我慢できなくなり、かやを捨てて逃げて行きました。

めでたしめでたし…とはなりませんよ。

もつと苦しめないと…ね

次に私が向かったのは唐辛子山。

そこで私は唐辛子を取り始めました。

そこへ馬鹿狸がやって来て

「おい兔っ!!この間はよく俺の背中に火傷をさせたな!!」
と、叫びました。

「違いますのっ…じゃない、違うのです。かや山の兔はかや山の兔です。唐辛子山の兔は唐辛子山の兔なのです。きっと馬鹿ダ又…否…お前は勘違いをしていやがるのです。それはそうと、お前、火傷をしていやがるのです?それならこの唐辛子を塗れば治るのです」

「そうなのか。それじゃあ塗ってくれ」

やっつぱりこの狸、馬鹿です…否、馬鹿だ。

唐辛子なんか塗ったら治る所が悪化するだけです…

この口調、何だか気に入ったのです…

否、そんなこといつてる場合じゃない。

えっと…唐辛子をたっぷりと狸の背中に塗り付けてやりました。

狸は痛くて我慢できなかつたのでしょう。山の奥へと逃げて行きま
した。

いい気味です…めでたしめでたし…とはまだいかないのです。

私は次に、松山へいって、松を伐ります。

するとそこにまたあの馬鹿狸がやってきて

「おい兔!!この間はよくも…よくも俺の背中に唐辛子なんか塗り
やがったな!!」

と、怒鳴りました。

「お前又勘違いをしていやがるのです…あ、違う…えっと…た
狸さん、あなたは勘違いをしているんじゃない…いるんじゃないか
しら。唐辛子山の兔は唐辛子山の兔かしら。松山の兔は松山の
兔かしら」

「おいっ、今『ですう』つつつたる!お前唐辛子山の…」

「うるさいうるさいうるさいかしら。きつと気のせいかしら。」

それより今日はいい天気かしら。釣りでもどうかしら。」

「そうか…。じゃあ俺にも舟を造ってくれ」

あ、危なかったかしら…ん？また口調が…まっいつか。私は自分の舟を木で、狸の舟を土で造りました。

しかし…何故狸は疑問を抱かなかったのでしょうかね。

土の舟で私と共に川の沖まで…この舟、まさか沖までもつなんて…どうでしょうか…あ、そうだ。

「狸さんごめんなさいかしら。釣り道具を忘れたかしら」

「はあ！？うさぎどん何やってんだよ」

「とりあえず…踊るかしら」

私は舟の上で踊ります。

「おっ、やるな、うさぎどん。よしっ、俺も」

狸は見事に私の策に引っ掛かり、

「…お前もなかなかやりやがるですう」

「な…おい兔、お前今なんて…うわっ！！」

土の舟は流石に踊る狸には耐えきれず、沈み始めます。もちろん狸もろとも…

狸はもがきながら

「お…お前、やっぱり唐辛子山…の…」

「ふん、今頃気が付きましたの。お馬鹿さあんですの」

「な…か、かや山…の…」

そういつて、狸は憐れにも川の底へと沈んでいきました。

しかし、狸が死んだことで、じじいの悲しみは癒えるのか、そんなこと誰にも解りません。

じじい以外には…ね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6956a/>

兎のお手伝い～復讐編～

2011年1月27日15時19分発行